

〈創作〉

——二人芝居——

『ポック・ボマー』

原子
修

暗黒

狼の遠吠え

沈黙

けたたましい電話のベル

焚火のあかり もえあがる

男 「ものうげにおきあがり）あるはずのない電話が どうして鳴ったりするんだ」

電話のベル やむ

男 「ふん、一三年まえの 受話器をはずしっぱなしにしていたときの おれへの電話が やっと きょう つながったってわけか」

電話のベル また 鳴りだす

男 「(炉端の枝をつかみ 音のほうにふって) あきらめろよ これからだって ずっとおれは 不在なんだから……」

電話 鳴りやむ

男 「ざまあみろ へん 電話なんて たかが空耳そらみみのうつくしきじゃあないか まことしやかな ばかげた幻聴装置じゃあないか (ぶつぶついい) けっ それなのに いったい なにをいまさら……」

男 手にもった枝を火に投げこむ

赤い火の反映 空間いっぱいにゆらめく

火のついたような犬の吠え声

男 「(不安気にうろたえ) さては かぎつけやがったか」

玄関のベルの音 けたたましく鳴る

いつ層ゆらめく火の反映

男 「(頭をかきむしって うろたえ悩み) なんて ありもしない玄関のベルが 図々しく鳴ったりするんだ だれが いまここにいるはずもない 一三年のちの 未来のおれを 訪ねあててしまいやがったんだ 畜生! おれの不在を食いあらしにやってくる 電気の犬め!」

ドンドンと扉を叩くノックの音

男 「(大仰に泣きわめき) あるはずのない玄関のドアが くるはずのない来訪者の 風のように透きとおった拳で ノックされている ああ(泣きじゃくり) とうとう どこにもいないはずのおれが ひつとらえら

れる でも おれは やっぱり この瞬間を待っていたのかもしれないぞ」

はげしい風の音 狼の遠吠え

空間いっぱい狂乱する火の反映

パツとあでやかに着飾った女 出現

明転

女 「(高笑いして) ほっほっほっほっほへロー ハーアーユーノ！」

男 「(居丈高に) だれだ？」

女 「(大きな赤い伊達眼鏡をはずし あたりをしげしげと見回し) ひゃーっ これでも家？ 柱も壁もコツソ

ソウ症にかかって もうすつかすか」

男 「ソコツソウ症にかかった あんたの脳味噌と おんなじってわけか」

女 「(あたりを嗅ぎまわり) くんくんくん なんとという匂い 生木の枝が囲炉裏の火で肌を焼かれて じゅく

じゅく すえた匂いで鼻がまがりそう」

男 「牝鯉のくせに 鼻なんぞ 曲げやがって」

女 「(鼻をつまみ) 壁や天井に敷きつめたササの葉が 煙にいぶされて 腐った炭素の匂いをはなっているわ」

男 「(竪穴住居というやつだ 夏は涼しく 冬は暖かい 縄文人の大発明についての無知こそは 現代人のわ

らうべき特徴といわねばなるまい」

女 「いくら縄文人をよそおつても 無駄よ 正体は すぐにばれるわ」

男 「(あわてて) ふん 竪穴住居が いわば人類の最初の本格的な土木工事としての性格をもつ という事実

は 例えば後期旧石器時代の オーリニャック文化期の ドルニ・ベストニツェ遺跡の マンモスの骨や皮など用いた堅穴ひとつとっても明らかといえる」

女 「(男に近寄り 鼻をつまんで) ひえーっ くさい 垢の鱗が びっしり隙間なく 体全体をおおいつくしている まるで泥沼を這いずり泳ぐ魚だわ くんくん あれっ 火薬の匂いまでするわ」

男 「(ぎよつとして) 牝豚め 牡豚の尻けつから何を嗅ぎつけやがったか」

女 「(男から離れ しなをつくって含み笑いし) えっへっへっへっへっへ でも じつと待っていたのでしょこの私の現れでるのを それこそ さかりのついた牡豚のように」

男 「畜生奴！ いったい おまえは誰なんだ 何の権利があつて おれの家に不法侵入する」

女 「じゃあ 言つてあげてもいいのよ あなたのおへその下 かつきり二・五糶の位置に鎮座しますホクロの神さまの直径を 三角定規で きつちり正確に測量し その結果を国際珍宝学会に発表したのは ほかならぬ この私だったという まぎれもない事実を」

男 「よくわからん なんという下劣なナメクジだ なんといういかがわしいバツタだ」

女 「じたばつたしたつて もう手遅れよ かつて一六世紀末から一七世紀初頭にかけてのロンドンに人間の姿をした太陽が出現したわ ウィリアム セックス アピーラ 詩人にして劇作家 俳優にして劇場経営者 崇高な創造者にして下卑た拜金主義者 彼も創立者の一人となったグロブ座の入口には へ世はあげて 俳優を演ず〜というラテン語が 刻みこまれていたわ そして それから四〇〇年程のちの極東・アジアの とある国の主都に 突如もう一人のセックスアピーラが さん然たる太陽の輝きをあらわした 詩人にして劇作家 演出家にして俳優 気高い創造主にして下賤な色事師 それが一三年前のあなたよ 書きおろしの戯曲集の扉には きまつてへこの世は劇場 人はすべて役者」とセックスアピーラばりの名台詞が 自筆で書きこまれていたわ」

男 「黙れ シェイクスピアをセックスアピラと何度言い間違えば気がすむのだ そのうえ そんな茶番劇
が この俺とどんな関係があるというのだ 畜生！ 下卑たカタツムリ奴！ 犬の糞野郎奴！」
女 「(にたりと笑って) その犬の糞を自分の巣に運びこむ糞ころがしが あなただっことを忘れちゃあいい
ないわ」

男 「帰ってくれ いったい 何の用で断りもなしに いきなり 押しかけてきたりなんぞするんだ」

女 「だっと呼んだのは あなたじゃあ ありませんか」

男 「いいがかりの針で釣りあげようたっで この世の海には そうトンマな魚ばかりいると思わない方が身
の為だ」

女 「あなたが 虫のサーカスとよんだ 狭つくるしい劇場の舞台で あなたが 最後に上演した作品は へ未
来を食べつくす女」というタイトルだったわ

(一人芝居を演じて)

月の光が さめざめと 銀のかなしみで地上をぬらす

甘ったるい香りを放つニセアカシアの並樹の陰が一人の女をしばらく出す

未来をたべつくす女

遠くからコツコツとアスファルトのドラムを打ち鳴らして 一人の男が近づいてくる

目深かにかぶったハットのひさしに妖しくかける夜の闇

くわえ煙草の火が さそりの星のように赤くともる

でも 彼は ひとり虚空をさすらう星の孤独を ひっそりと焚きしめているのだわ

突如 女は男に襲いかかる

いいえ 決して飢えた豹のようではなく 満ち足りた蝶の軽やかさで 現在という徒花の蜜を吸いつく
したものが さらに未来の蕾の内部にしのびこもうとする あの蝶の艶やかさで 一瞬 男はうろたえ
立ち止まる

花に変身した自分が信じられないというように じっと女をみる

女が艶然と 極彩色の笑みを 男になげかえし 言う

— あなたなしには生きられないわ

男は、あのれの内部がかもしてきた蜜を守りぬこうとするものの不安とおそれにこわばる舌でいう

— 世界の季節を見放してしまった僕には もう 何一つ残されてはいない

嘲笑って女がいう

— いずれ私は死に あなたも死に やがて太陽は燃え尽きて 地球も消滅する

滅びの蜜は 甘美だわ

— 自分の未来という 究極の蜜をすすればいいじゃあないか

— いやよ 私の蜜とあなたの蜜のカクテルを飲みほしたいのよ

いつの間にか 二人は裏まちの安ホテルの一室に吸い込まれて 消える

男は女と一緒に終末のベットに横たわり 彼の未来が つるつると細いスパゲッティのように 音たてて すずりとられていくのにじつと耳をすます

こうして 男と女の臉のかけで 世界は 静かに 永遠の暗黒へとおのれを閉ざしていくのだわ」

男 「何というお笑い草だ たかが口説き上手な売春婦が うぶな知識人の一人を言葉たくみにたぶらかして その夜の客に仕立てあげたというだけの話じゃあないか」

女 「確かに あの劇場で 劇作家 演出家 主演俳優として さん然と輝く勝利の栄冠を手に入れたのは 他ならぬ売れっ子のあなただった

汚れ役の私には パンぐずほどのおこぼれの拍手が パラパラとこぼれおちてきただけだったわ

だけど やがて あなたのお芝居が <この世は劇場>という あなたのお好きな言葉通りの 第二幕のステージへと急展開をみせようとは 二〇世紀の極東のセックスアピラといえども 予測しがたい罠だったに違いないわ」

男 「セックスアピラじゃあなく シェイクスピアだと いったい何度 誤植の訂正をしなくちゃあ ならないんだ」

女 「つまり今度は あなたのマンションの入口で 女優の仮面をぬぎ捨てた私が 演出家の鞭を手放したしがない独身男のあなたを 演技ではない演技 つまり究極の演技の網にめしとってしまおう

ちらりとみせた私の乳房の まばゆい半球が あなたを盲いにしてしまうのに そう時間はかからなかったわ」

男 「(はげしく興奮し) 黙れ 黙らないと脳天を打ちぬくぞ (ピストルを取り出し つきつける)」

女 「ふん どうせ水鉄砲でしょう ピストルの形をした蛙が おしっこをたれるだけよ」

男 「(わなわな震える手にピストルを握りしめ) 蛙のおしっこで 命をおとすぐらいがあんたにはお似合いだ」

- 女 「手をのばして 男に近寄り ゆっくりとピストルを取り上げ」 男って みんな 自分のピストルだけでは満足できずに ついもう一丁ほしがってしまう さもしい動物なんだわ（弾倉をまわして 実弾の入っているのを確かめ） まあ 実弾だわ（男にピストルをつきつけ）でも あの夜（この世は劇場の舞台にのぼった実物のあなたのピストルには 実弾がこめられていなかった（男の額にピストルの銃口をあて）あなたは 不能者だったのよ 敗北者だったのよ
- 男 「（両手を上げて泣きわめき）殺してくれ そのピストルで 今すぐ 僕の頭蓋骨に風穴をあけて 死神のおもいの糸を通してやってくれ」
- 女 「犬死にさせてたまるもんですか」
- 男 「じゃあ 猫死にでもいい」
- 女 「鼠死にだって だめだわ（ピストルをテーブルの上に置き）あなたはねえ 生きていてもらわなくちゃあいけないのよ」
- 男 「なぜだ どうして 鼠にしがみついて生きるシラミほどの値打ちもない この世捨て人の俺が 生きていなくちゃあならないんだ」
- 女 「（華やかに笑い）ほっほっほっほっ あなたの値段を決めるのは けっして あなたじゃあないわ」
- 男 「漁業協同組合の卸売市場じゃああるまいし なんて このおれが みずしらずの他人に ダボハゼか チョーチンフグのように セリにかけられ 値段をつけられなくちゃあならないんだ」
- 女 「（ほくそ笑み 男の顎を手でさすり）それは やっぱり あなたが いまも 相変わらず このくにのだけれもが ただならぬ関心をよせている 最重要人物の一人だからよ」
- 男 「（女の手をふりはらって 甲高く笑い）ハッハッハッハッハ 人里はなれた山奥で 電気もガスも水道も

なく ひっそりと ヒエやイモを栽培し ドングリをひろい 川魚をすどつてくらしている ひげぼうぼ
うの 体じゅう垢だらけのこのおれが いったい どうして 現代のVIPとしての栄光に浴することが
できるんだ(とつぜん 激昂し 大声で)でていけ 口紅をぬった女ママシ奴! 口からでまかせの毒汁
を吐きちらす蛇奴! おれは おまえなんかと なんのかわりもない みずしらずの人間にすぎないん
だ」

女 「男の顔にじぶんの顔をよせ」そうかしら 縄文人の仮面をかぶった現代人さん(指で男のひげをかきわ
け 顔いちめんのあばたをさらけだし)あなたが どんなにもじゃもじゃひげや ぼさぼさ髪でかくそう
たつて あなたの顔を月の表面のように神秘化している この アバタの大群は むかしから ずっと
あなたの存在証明でありつづけたし それは いまも かわらないわ
(男の顔からはなれ 男の顔を指さし 冷酷な声で)

アバタさん 英語では ポックさん もう 逃げもかくれも できないわ」

男 「居直つて ふてぶてしく」ふん というわけで おれの この 幼いころからの虫くい顔に 馬鹿値
をつけたつていう 馬鹿馬鹿しいはなしか」

女 「(嘲弄するように笑い)虫くいじゃあなく女くいの顔よ(やにわに 男の顔にキスし)そおら また一つ
ふえた(たからかに笑つて)ね ポックさん こうして あなたの顔は あなたの好色の釣り針にひつか
けた女のかずだけのアバタで 華れいに飾りたてられることになったんだわ(とつぜん真剣な表情で)そ
して いまや 世の中は あなたの その 女くいの顔に なんと 三億円もの懸賞をかけるまでになっ
たというわけなのよ」

男 「えっ おれの この 掘りたてのジャガイモのようにこきたない顔に 懸賞金!」

女 「一粒三億円のイモ!」

男 「ポテトも ずいぶんと 値上がりしたもんだなあ

(腰をかがめて 女のまわりをめぐり)

ははあ それで あんたが ここへやってきたってわけか

イモ掘り!

ハッハッハッハッハ(笑う)

(女のきらびやかな服装に一つずつ手をふれ)だが こんな絹の手袋じゃあ ジャガイモの茎をにぎっただけで たちまち手が緑の毒汁で ベとベとになってしまふのが落ちだ

(とつぜん 絶叫して) でていけ 詐欺常習犯のオコジョ奴! 懸賞金目当ての牝ダヌキ野郎!

女 「わざとびつくり驚天の大仰な仕草のあと にわかに艶っぽいしなをつくって 男にすり寄り) ねえ ポックちゃん おこったりしちゃあいや(男の手をとり)もういちどあなたの ジャガイモの茎を ぎゅつと握らせてえ わたしの この 雪のように まっしろな手袋が あなたの汁でベとベとになってしまふまで ぎゅうと握らせてえ」

男 「(衝動的に 女を抱きしめ 泣いて)

畜生奴! なんていう 毒の甘ったるさだ なんていう 破滅のここちよさだ」

女 「(男の頭をやさしく撫でて) わたしの かわいいポックちゃん さあ さあ さあ」

男 「(とつぜん 女をつきはなし) ああ やっぱり だめだ(頭をかきむしり 床につつ伏して泣く)」

女 「(にわかに 捨鉢な口調で 荒々しく)

ざまあみろい インポテンツ奴 (急に口調をかえ) といった風にして 一三年まえのあなたは わたしに 罵られ 今日とまったくおなじ様に床に泣きくずれ つぎの日とつぜん 当代随一の劇作家にして演出家 俳優にして詩人のあなたは わたしたちのまえから姿をけした……マンションのテーブルの上に へお

世界よ 猿芝居奴！と書いた一枚の紙をのこして

(また 伝法な口調に戻り) やい！ 性的不能者奴！ 現実世界では女性一人満足させることのできないインポテンツ野郎！ (普通の口調に戻り) と、わたしや わたしではない別の女から面罵されるのがこわくって あなたは 卑劣さの尻尾を地面にずるずるひきずったまま 表舞台から 逃亡したのよ
そして この世が いかにかいせつな猿芝居にすぎないか ということを証明するための仕事に とりかかったのよ

いや すくなくとも あなたじしんとしては そう 思いこみたかったのよ
でも ねえ ポックちゃん

あなたは とんでもない誤算の罠に じぶんを突き落としたんだわ……いや あるいは ひよつとしたらそれと知っていて むしろ 意図的にねえ」

男 「(兇暴にたちあがり 女をなぐるうとして 寸前で手が凍り じよじよに 力なく手を垂れ ゆっくりと床に膝まづいていきながら) ああ なんとという猿芝居の名優ぶりだ まっかに腫れあがった尻の火事までが 人類の夕焼けぶりを ぼうぼうと 演じている」

女 「(勝ち誇って) そら ねえ ポックちゃん あなたは しきりに 二〇世紀末人類が 熟れすぎたトマトのように ぐちゃぐちゃ 腐って 人間としての尊厳の枝から ぼろりと地面におっこち べしゃつと音たてて破滅するであろう……なーんて いても高邁なる予言者面でのたまうけれど (侮べつ的に) へんなによ あなたの行動のすべての動機は そんな 高尚な 文明批評とか 人類への警告なんでもんじゃあない

(男に近より 男の顎を指でもちあげ) 女よ あなたの欲望の火をかきたてはするけれど いざとなればあなたを みじめな不能者として 屈辱のベッドに置き去りにしていく女への復讐よ (男の顔を宙につき

はなし 勝ち誇って立ち 見得を切って) わたしへの復讐よ」

男 「手で頭をかかえ) 神よ あなたが この地上に女を創造されたのは やつぱり まちがいだったと この女は告白しております」

女 「嘲笑して) ふん なによ じぶんだって 母親という女の しかも いちばんきたならしい血によごれた産道を通って この世にうまれてきたくせに」

男 「(にわかにはちあがり 女を指さして はげしく) 呼ぶぞ 牙をむいた犬を 人の肉に飢えて のどをごろごろと鳴らしている狼を」

狼の遠吠え

女 「(平然と) 呼ぶがいいわ どうせ 去勢されて テイツシュ・ペーパーの空箱のようになった犬と とつくに絶滅して陽炎のようにゆれうごく幻の狼が あらわれるだけよ

(急にすみ)でも ポックちゃん あなたは もう とつくに ここに 呼んでしまったのよ 睾丸抜きされた犬よりも 根絶やしにされた狼よりも もっとおそろしい野獣を! わたしを!」

男 「(木の柄にとりつけた石の斧をふりあげ) 野獣なら殺しても罪にはならんぞ!」

女 「(男に近寄り) さあ殺してごらん 縄文人のポックちゃん シカの額をうち砕き トドの首の根を断ち切った その石の斧で あなたの女神の頭蓋骨を 皿を割るように割ってごらんなさい あなたの偏執病的な憎悪の対象である女への わたしへの復讐を さあ石の斧の どっしりと重い一撃で ものの見事に果たしてごらんなさい」

男 斧をふりあげたまま 全身をぶるぶるふるわし ついに ふりあげた手をおろし 斧を床にお

とす

犬のキャンキャンという弱々しい悲鳴

女 「(凶にのつて) そうら やっぱり できねえだろう ポック・ボマー奴！」

男 「(弱々しい女を見上げ) ポック・ボマー？」

女 「(威丈高に) そうだ おまえが あの悪名高き爆弾犯人のポック・ボマーだ」

男 「爆弾犯人？」

女 「(乱暴に) しらつばくれのだましの縄で こっちの追究の鉾先をばくろうたって そうはさせねえ あばた面の卑怯者奴！ (にわかにいんぎんな口調で 嘲弄し) 復讐はしたいし 勇気はなし ホッホッホッホ

こころから深く同情申し上げますわ ポック・ボマーさん

なにしろ あなた様は 世にも稀なるヒューマニストでござんして じぶんの手では(とつぜん 伝法な口調で 歌舞伎調の見得を切り) ゴキブリ一匹 ころせねえー！ (もとのいんぎんさに戻り) でも じぶ

んの目のまえの女をじぶんの手で殺せないという究極のインポテンツ病にかかったあなたが さいごに じぶんを救うために考えだしたのは あの 世にも巧妙にカモフラージュされた 小包爆弾だったんです

わよねえー」

男 「小包爆弾？」

女 「そうございますのよー ポック・ボマーちゃん (急に居丈高な口調で) やい 神妙に 白状しろい！ てめえは電脳化されたハイテク文明を告発する などと 二〇世紀末の知識人に共通のオトボケの理くつで おのれの魂をだまくらかし その実 おのれの性的不能をあばいた女への もっともプライベートな怨みを

はらすため なんのかわりもない女たちに 小包爆弾という 死の郵便物を送りつけ なんと この一
三年間で 死者四人 重軽傷者九人（口調をかえ）しかも爆弾の送り先が 女性の政治家 つまり ポリ
テシヤンと 女性の官僚 つまり オフィシャルダムと そして 女性の資本家 すなわち キャピタリ
ストに限られていたので 捜査当局はポリテシヤンのPと オフィシャルダムのOと キャピタリストの
Cの 三つの頭文字をつなぎあわせ それに爆弾犯人のボマーをくつつけて ポック・ボマーというコー
ド名をつけた（男にすりより）でも わたしには わかったのよ。ポックというのは POCではなくP
OCK つまり アバタなんだ……と（男のひげと髪をかきわけ 顔にふれて）ね ポック・ボマーちゃ
ん アバタの爆弾犯人（大声でわめく）それが あなたの なれのはてよ！」

男 「なんの濡れ衣のべたべただ どんな証拠を傘に着て ピチピチチャブチャブ 下手なでつちあげの雨を
ランランランする」

女 「（大仰に笑い）証拠？ 性こりもなく よくぞ この機に及んで そらぞらしい寝言の鼻ちようちん ど
んな逃げかくれの軒下に ぶらぶら 吊りさげるおつもり？」

男 「女をつきのけ 両手をひろげて まわりをさし）みる ここにはりめぐらされているのは クモの巣の
インターネットだ ここで作られるのは 神聖な焚き火の焰がうみだした 土器の壺という爆弾だ そ
れを 人里まではこびだすのは おれの両脚というトラックで おまけに 下の村には 郵便局もない
いまは 一万年まえの 縄文人のくらしにかえってしまった このおれが どうすれば その ポック・
ボマーとやという そらおそろしい爆弾犯人を演ずることができるといふのだ

（大声で笑い）さあさ 猿芝居の女優さん 下手はあちら さいごのセリフのあとは どうぞ 足元と尻元
に気をつけて ご退場ご退場（おじぎをし 手で出口をさす）」

女 「うなだれ すすり泣いてくやしけれど しかたないわ（出口に向かいかけ 突然 ふりかえり 大

声で笑い)と喋ってわたしが あなたのへこの世は劇場からはけてしまったら せっかく きょう 前
 売りで 円 当日券 円もの 大枚の入場料を 気前よくだして(声をひそめ)なんて言つて 実は
 義理買いかもね(声をもとに戻し)おみえのお客さんに(歌舞伎調で)おわびの仕様もございませぬ(男
 のまえに戻り 馬鹿丁寧)ね ポック・ボマーちゃん 観念した方がいいわ しらべは もう とつく
 に ついでいるのよ」

男 「なんの？」

女 「(伝法な口調で 片裾をめぐって 足をふみだし 見得を切り)かつては 白昼の世界に君臨する スー
 パースター 太陽の栄光を一身に集め いまは 深夜の闇の不気味な名声をほしいままにする ポック・
 ボマーが かくれもなき 変装の名人(歌舞伎調で)たあ おしやかさまでも 気がつくめえ(舞台中央
 で ゆっくり 煙草をとりだし 煙を吐いて)ある日 この小屋の入口から ごく普通のハイカー姿の女
 が すらりと つやつぱい仕草で でてくる 背には ずしりとしたリュックが やがて おこるであら
 う大惨事の重さを 黙々とかくまっている

でも 記憶のいい観客なら その女の顔が まぎれもなく 主都の劇場で一三年まえに上演され 絶賛を
 博した芝居へ未来をたべつくす女へに出演した あの 売春婦とまったくおなじ という事実には すぐ 気
 がつくはずだわ

つまり 小屋をはなれ 人里へと ハイカーのかるやかな足取りでおりにいく その女の顔は だれある
 う この わたしなのよ

やがて 女は 人里ちかくのバス停で 遠く離れた都市行きのバスに乗る
 うつむき加減のその女の顔をのぞきみるものなど ひとりもないわ
 都心にはいって 女はしのび風のように降り 鉄道の駅のトイレに入る

ほどへずして ドアをあけ でてくるのは もはや ハイカー姿の女ではなく 完全にへ未来をたべつくす女」の舞台にたったあの売春婦 つまり わたしと 寸分たがわぬ服装の女よ
いつのまにか リュックがポストンバックに早がわりしていて、それをさげた女は 主都からはるか西に位置する大都市行きの寝台列車に乗りこむ

一三年前のへ未来を食べつくす女」の観客席に座ったものなら だれだって わたしそのもの と思いきこむような仕草で その女は バス・トイレ付きの個室に入り 鍵をかける

翌日 西の大都市の駅に降りたった女は 都市のごったがえす郵便局で ポストンからとりだした重い荷物 小包発送のカウンターにおき 料金を支払って 姿をけす 三日後 とんぼがえりした売春婦姿のわたしが 出発した駅のトイレで こんどは山菜採りの老婆のすがたに変装し バスで この堅穴住居に帰りつく頃には 主都の著名な女性政治家の事務所 小包をあけたアルバイトの女子大生が 閃光と轟音と硝煙の中で 手と胸と顔を吹きとばされ 血まみれのまま 息絶えている

(男の顎を指でもちあげ) ねえ ポック・ボマーちゃん、つまり あなたがへ未来を食べつくす女」の続篇で登場させたのは むしろ へ未来によって食べつくされる女」としての 小包爆弾犯人としてのわたしだった というわけなのよ」

男 「(せせら笑い) へん その程度の推理小説なら 小学生にだって 書けらあね」

女 「それは あなたの復讐の心理構造が 小学生レベルのものだからよ」

男 「復讐? (せせら笑い) そいつは消毒液でたっぷりと汚染された水道水を飲みすぎて 全身に科学物質の毒がまわった あんた方文明人の 自己処刑シンдрームの一つだろうて 縄文人とおなじ 山奥の湧き水をすすって生きる このおれには なんのかわりもない 不毛な感情だ」

女 「そうね この隠れ家にかえって また ひげと髪を伸ばしはじめ もと通りのポックちゃんに戻って

くあなたは また けがれなき縄文人に再生していくわけよ だって 小包爆弾を送りつけたのは あなたではなく この わたしなのですものねえ」

男 「あんたも あの多重人格愛好症にかかった重症患者の一人ってわけか(嘲弄して)救急車をよびましようか? ヒグマの形をした どう猛なボンゴ車なんぞを」

女 「ブーボーブーボー(車の運転の仕草から 突然 椰揄の調子にかわり)でも ヤマオヤジの胃袋という救急病院にはこばれていかなくちやあならないのは(男を指し)あなたよ」

男 「片隅の土器の壺に手をかけ)さあ ドングリの実のアクぬきでもはじめるとしようか あんた方大量生産工場製のパンに慣れきったハイテク信奉者には 夢にもかんがえられない 自然の味覚に祝福された縄文の団子を」

女 「(狂ったように絶叫し)ペテン師! 縄文人の仮面をかぶったイカサマ野郎!(ドンと足で床を踏み鳴らし) 一見 縄文人の 親自然的な竪穴住居とみせかけた この住まいの下には いったい なにか かくされているの?(声高く笑って 男に近づき)わたしの耳には 超高性能の超小型金属探知器が組みこまれていて 一見 土間に草を敷いたようにみせかけた この床の下に金属のさまざまな装置や材料がいつぱいかくされているのを もう いち早く探知しているのよ(また笑い 嘲弄して)そればかりじゃあないわ ポック・ポマーちゃん わたしの目には 超々高性能の超々薄型のコンタクトレンズ状の赤外線カメラが内蔵されているのよ(楽し気に)おしえてあげましょうか わすれっぽいふりをするのが大好きな 小包爆弾犯人ちゃん この床の下にはねえ(男を片手で抱きしめ 片手で床下を指し かぞえるように)ほーら 殺傷力のすぐれた特殊火薬のボトル 精巧な起爆装置の部品 小包の形の爆弾となる金属片 そして爆弾製造の企画書 手引書 つまり 台本のかずかず(両手で男を抱き ひげと髪をかきわけ)ねえ地下の穴ぐらにかくされたへ未来を食べつくす女)の売春婦の衣装を わたしの目のまえで 着てみせてちょ

うだい ひげを剃り 髪を切り わたしそっくりに メーキャップしてみせてちょうだい(男の耳もとで) そうすれば あなたがわたしになつて わたしは もう不要になり わたしは ここを でていくしかない くなるわ ねえ お願いだから ポック・ボマーちゃん そうしてよお」

男 「女を抱きしめ すすり泣いて」なんていい匂いだ なんてやわらかい感触だ あんたは やっぱり愛のかたちを装って おれのまえにたちあらわれた 堕天使なんだ」

女 「甘つたるく」事件と同時に ワープロ打ちされた犯行声明文書を送りつけられる先は きまつて かつて あなたに好意的だった新聞社だったわ(男からはなれ ゆっくりと歩きまわり)でも その犯行声明文も じつは わたしへのラブ・レターだったのねえ この一三年間に 全世界にむけて発表された 一通の犯行声明文を 一列にならべて 読み通せば すべては あきらかだわ(バックから紙束をとりだし 床にならべ)さあ もう一度 台本読みしましょうか この一通のはじめからおわりまでの 故意に 漢字やひら仮名を カタカナにした部分だけを 横につないで 読みかえしてみましようか(一枚ずつを指さし ゆっくり 一語一語 区切って 読み上げる)オ オ セ カ イ ヨ サ ル シ バ イ メ それから 文章の中に 全く無意味に挿入されたかみえる 数字を 読みあげてみましようか(また 一枚ずつ指さし ゆっくり 一語ずつ 区切って よむ)四 三 二 九 一 四 一 三 八 (哄笑)ねえ これ わたしへの招待状なのよ 一三年かけて 女性政治家 女性官僚 女性企業家の身辺の 一三人の死傷者という 人類史上初の 珍しい切手を貼りつけて 送られた わたしへの恋文なのよ (高らかに 調子をつけて もう一度 今度は普通のスピードで読み上げる)へおお 世界よ 猿芝居 奴ノ 北緯四三度二九分 東経一四一度三八分ね これで すべては明白よ だつてへおお 世界よ 猿芝居 奴ノ という捨台詞は わたしだけにむかって吐かれたものなのだし この隠れ家の位置は まさしく 北緯四三度二九分 東経一四一度三八分なのですねえ(にわかに威丈高になり)でも 何故よ 何

故なのよ こんな危険を冒してまで わたしを ここに 呼びよせたのは？」

男 「狂ったように 紙切れを蹴散らし 踏みにじり)でっちあげた！ 蛙のシヨンベンだ！ イタチのセツ ナツペだ！（紙をひろい集め ぐしゃぐしゃにまるめ パツと 虚空に投げ）毒のオツパイをもつ女郎グモが デッカイケツの穴からひりだした 策謀の罫のねばねばだ」

女 「(冷静に) 証拠隠滅のつもり？ その紙はコピーよ いくらだって 紙吹雪の材料は提供できるわ(男を指さし 詰問するように)でも とうとう 吐いたわねえ

なにしろ えせ縄文人のあなたにとっては 裏の谷川の流れを利用した自家発電などお手のものですし バッテリー仕様のワープロは ちゃんと この床下にご安泰となれば(男にすりより)でも おしえて あなた やっぱり わたしが好きなの？ わたしを愛しているの？」

男 「いきなり 女の首をしめ 泣きわめき)殺してやる！ おまえが死ねば おれは だろどろと腐って悪臭ふんぷんの欲望の蜘蛛の巣から解放され 正真正銘の自由を獲得することができるんだ！」

女 「(男を抱き あえいで) さあ 殺して ほんとうにわたしを愛しているのなら その手で ひとつおもいにわたしをしめ殺して」

男 「(しめ殺そうとするが 結局 手をはなし床につつ伏して) ああ やっぱり できない(泣いて) 畜生！ おれは なんて卑劣なインポテンツ野郎なんだ 素手では 女はおろか 蚊トンボ一匹殺せやしない」

女 「(男に近より やさしく撫でて) なんてかわいそうな不能者なんでしょう じぶんそのものでは 蓮葉な売春婦ひとり 犯せやしない(男の顎をもちあげ)でも わたしのかわいポック・ボマーちゃん あなたにできる たった一つの 比類なく男らしい犯罪があるわ」

男 「(よわよわしく) おれに！」

女 「(男を膝で立たせ 甘ったるく) さあ わたしの愛するポック・ボマーちゃん 勇気の燠を吹きおこして

まっかな火を心臓にともし 熱い風が指先にまでも吹きめぐったら おもいきって 床下の穴倉につうずる通路をおしひらいてへ未来を食べつくす女」の売春婦の衣裳をとりだすのよ そして わたしの目のまえで それを身にまとい 髪もひげもすっかり剃りおとして わたしとまったくおなじような姿になるのよ いや わたしそのものになるのよ そして もう 二度と もとのあなたには戻らないのよ」

男 「女にとりすがって）それで？」

女 「（男の髪をなで やさしく）性的不能者としてのポック・ボマーは消滅し 男としてのじぶんをすてる能力を全世界に証明することのできた 輝かしい女となって あなたは ものの見事に 復活するのよ」

男 「復活？」

女 「そうよ 世界の劇場は もう一度 こんどは あなたの演ずる売春婦による へ未来を食べつくす女」の上演でわきたつのよ」

男 「そして あんたは？」

女 「わたし？ あなたが わたしの姿になった瞬間 わたしは 消滅するしかないわ」

男 「消滅？」

女 「世界は 二人のわたしを必要とはしていないわ

あなたは わたしとなることによって わたしの全存在を強姦し 性的不能者の汚名をかなぐりすて 一方 わたしは あなたによって実体を奪われた影となって あなたの眼の前から消え去せるのよ」

男 「影？」

女 「実体のない影となって ここからたち去るのよ」

男 「（女の方に両手をのべ叫んで）たち去る？ ああああ（絶叫）」

暗転

狼の遠吠え

沈黙

けたたましい電話のベル

女の声

「(恐怖に震えて) あるはずのない電話がどうして 鳴ったりするの?」

電話のベル やむ

女の声

「ふん 一三年まえの 受話器をはずしっぱなしにしていたときの わたしへの電話がやっと きょう つながったというわけね」

電話のベル また 鳴りだす

女の声

「あきらめてよ これからだって ずっとわたしは 不在なんだから……」

電話 鳴りやむ

焚火のあかり ふえあがる

売春婦姿の女 手にもった枝を火に 投げこむ

赤い火の反映 空間いっぱいゆらめく

火のついたような犬の遠吠え

売春婦姿の女

「(不気味にうろたえ) さては ばれたか」

玄関のベルの音 けたたましく鳴る

いっ層ゆらめく火の反映

売春婦姿の女

「(うろたえ) どうして ありもしない玄関のベルが 凶々しく 鳴ったりするの」

ドンドンドンと扉を叩くノックの音

売春婦姿の女

「(泣きわめき) あるはずのない玄関のドアが くるはずのない来訪者の 風のように透明な拳で ノックされる ああ (泣きじゃくり) とうとう どこにもいるはずのないわたしが ひつつかまる でも わたしは じぶんの未来を食べつくしてしまったのだから もうだれも わたしをひとつとらえることなどで

きないわ」

はげしい風の音

狼の遠吠え

空間いっぱい狂乱する火の反映

ドンドンドンと扉を叩くノックの音

売春婦姿の女

「あの女奴！ わたしの懸賞金を手に入れようたって そうはさせないわ(ピストルをにぎって こめかみに銃口をあて) おお 世界よ 猿芝居奴！ このピストルに残った指紋で あの女が わたし殺しの犯人と断定され 今世紀末の茶番劇の幕がおきるんだわ」

暗転

ピストルの発射音

沈黙

狂ったようで そのくせ 変に美しい音楽が はじめ低く しだいに高まり

幕